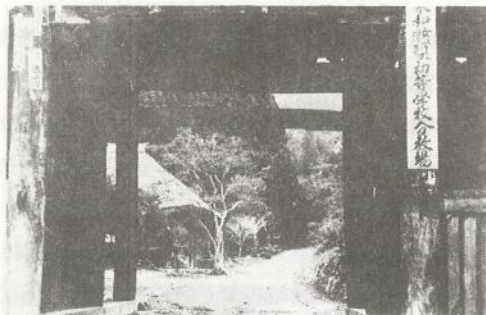


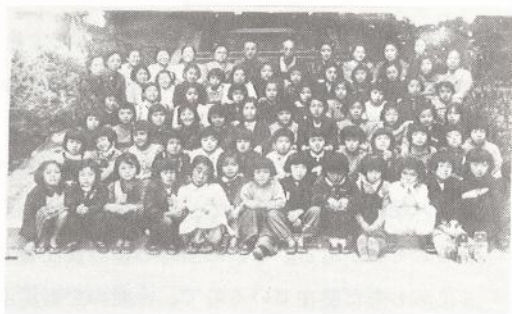
# 史料室だより No.5

東洋英和女学院史料室委員会  
発行 1978年11月6日

## 〈創立94周年記念特集号〉



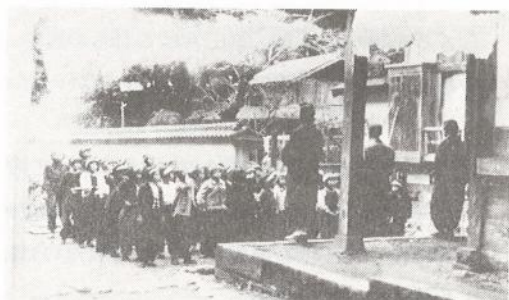
山門の標札  
(最初の標札は東洋永和疎開学園とあったが、それは寺院の方で任意に作ってくれたものでした)



みんなの顔  
(4・5・6年のみーほとんどモンペ姿)



おべんきょうは こうでした  
(右端中沢先生一戦災死)



今から作業に出かけるところ  
(後ろ姿は中沢・高木・松本の3先生)



稲刈作業に出動?  
(部落の人から指導を受けている)



大広間での食事風景  
(ジャガイモだけの時もあった)

写真—山下弘子様(旧姓外崎)のアルバムから

## 集 団 疎 開 記

元小学部部長 外 崎 長三郎

### 《おことわり》

集団疎開は敗戦と同じく、日本国民が建国以来初めて遭遇した異状事であった。それだけにこの貴重な体験も、今にしてその事実を記録しておかないと年月と共に風化して、歴史の彼方に消え失せるおそれがある。幸いに当時の担当責任者であった私も未だ健在しているので、今度の企画は正に好機到来といささか張り切ってみたのであるが、限られた紙面ではとても収録しきれそうにもない。残念ながらかつての六十五年小史同様断片的にならざるを得なかった。第三者はこれらの点を一本の線につなげて当時の状況を想察していただくことにしたい。

### 《集団疎開の背景 — 敗色濃くなった中で》

東洋英和女学校小学科が「東洋永和女学校附属初等学校」と改称を余儀なくさせられたのは昭和16年4月のことである。

日米開戦にひた走る日本国政府の米英排撃思想は、外人牧師とミッションスクールの存在が目ざわりで仕方がなかったことだろう。のみならず蛇足に見えた全私立小学校を葬りたいがゆえに「国民学校」と呼ばせなかった。

開戦に伴ってキリスト教学校の中核とも言うべき礼拝も制約を受け、宮城遙拝や時には詔書もおりませて讚美歌さえも遠慮勝ちになってくる始末。戦況が日を迫って不利となり、戦線がじわじわと狭められ、サイパン島が陥落した頃からいよいよ敗色が濃厚になってきた。

そのため危機感の迫る昭和19年3月から4月にかけて、都内児童の疎開が叫ばれるようになり、先ず「縁故疎開」の勸奨がはじまったのである。

小学科も3月中に約30名の児童が親戚知人をたどって学校を離れ、それが新学期の4月5月と進むにつれ、各クラスとも櫛の歯が抜けたようなありさまであった。新1年生も辛うじて定員を充たす程度であった。

「防空服装強化日—第1時限待避訓練—古賀元師葬列送迎（注・当時古賀元師の長女が小学科を卒業して女学校に進学していた）—警戒警報発令中につき休校—くずもちの配給を行う—小田部（正巳）教諭応召のため第2時限講堂において壮行会（注・同教諭は入隊したが健康上即日帰郷となったがそのまま退職、現在秋田県横手市在住）……」当時の学校日誌を追って拾ってみただけでもあの頃の学園の様相が生々しく想起される。一方女学生も工場等への勤労働員が始められ、歩一歩と学校の形態が崩れて行くのであった。

### 《栃木の山里 出流山へ》

迷いと苦悩—かくして7月にはいと、縁故先きを持たない都内小学校全児童に対して集団疎開を執行するという大方針が立てられたのである。私立校で自家施設を持っている学校はそれを利用して差し支えないが、無い場合は公立校同様、都が指定する所に疎開するという指示であった。

当時英和は野尻湖畔にキャンプを持っていたが（YMとYWの中間）、そこは交通の便も悪く冬は寒冷、その上食糧も乏しい。姉妹校の山梨英和の寄宿舎を借りられないものかと発念、急ぎ私が出向いて雨宮校長（故人）にかけ合ってもみたが、都の方が難色を示して不調に終わる。そのことで県庁に出かけたら山梨担当の都の某視学官とバッタリ出会った。「君のところの割り当ては栃木県

ではないか。山梨に割り込まれては困る!!」施設も食糧もそれだけ減少することになるのだから無理もない話。恵泉学園が御殿場に寮を持っているというので河合校長（故人）に頼み込んでみたがこれも芳しくない。一方父兄の中からも「誰それの持っている房州の別荘」「いや福島の温泉地なら私が交渉して上げてよ」の声などあったが、いよいよとなると実現しそうなことばかり。混乱が続くばかりであった。それもこれも役所の支配から逃れたい一念からである。自由選択の途も絶えたので不本意至極だが都からの指定を待つより仕方がなかった。8月になって区役所（麻布）から呼び出しがあった。若い担当吏がぶっきら棒に「あなたのところはここですよ」と示されたのは、栃木県の出流山千手観音の満願寺であった。思わずハッと息を呑んだ。― こともあろうにキリスト教学校に対して仏寺を割り当てるとは。区内の公立学校は共同ですでに現地調査点検も終わり、それぞれ公会堂とか学校の裁縫室とかを先き取りしてしまって、誰も望まない悪条件の僻地をわが東洋英和に割り振ったではないか。食べ残しを与えられたという無念さと怒りを抑えることができなかった。

浅草より東武線にて2時間栃木市着、それよりバスにて約1時間、5里山奥の寺尾村出流山（満願寺）、副食物極めて不自由にして冬季寒冷甚だし。

吏員の手元にある調書の備考欄の記載事項である。やる方なきうっ憤を安井でつ校長（故人）にぶつけた時の安井先生のことばは今だに胸底深くしまいでいる。「外崎さん、怒りなさるな。それもみななのだから。神さまはよくして下さるでしょうよ。」さらばわが母校よ、また会う日ま

で― 昭和19年8月19日は銘記すべき日となった。1・2年生と担任教師と若干の専科教師、それに事務担当者などを残して、3年生～6年生計72名の学童は、私が先頭に立ち教師寮母など11名を加えた83名の集団となって校門を後にした。防空頭巾にリュックサックの戦時色、心なしか先頭の子が掲げた標旗もこゝろを垂れてうつ向きかげんに見えて仕方なかった。涙を押しかくして別れの手を振った父母たちのあの見送りの光景を忘れることができない。

### 《疎開生活摘記》

#### ○ 敵機来襲ない中での東京と出流

満願寺は古来「荒行」の出流山としてその名が広く知られ、坂東の札所の一つでもあり、寺格も高く、住職の長は一般に「御前様」と尊称されているほどである。栃木市から穴ぼこの道を1時間ほどバスに揺られて辿り着いた山門には「東洋永和疎開学園」の真新しい門札が一行を迎えてくれた。いよいよ“終わりになき”集団生活が今日から始まるのだと思うと何んとか胸が締めつけられる思いがした。

72名の子どもたちは予め計画しておいたとおり庫裡（本館）と山の上の別荘との二手に分宿させることになる。食事時や集団行事には別荘（楓寮と命名）の子たちは曲りくねった山道を往復しなければならぬのであるが、そんなハンディをものともしないで集団生活を楽しんでいる姿はまことにいじらしいものであった。こうして子どもたちは疎開生活に徐々に溶けこんで9月10月と時が経っても、一向に東京空襲など起らないでいるだけに、わが子を手離れた空虚寂寥は覆うべくもなかった。そこにいとしいわが子の手紙が寄せられ、何かにつけての不如意さを誇張して伝わったりするものだからたまったものではない。火に油を注ぐようなものである。当分面会謝絶とあれ

ば不満が倍増する。その頃である。ある勇敢な母親が3人ほど仲間を作って面会にやって来た。体よく玄関でお引きとりを願ったものだからたまらない。恨みを一身に負う始末であった。

東京ではまた父兄たちが、「栄養が保てる食事を提供しているのだろうか。冬になると滝つぼが凍るそうだが、それならば引き取らなくてはなるまい。」喧々たる論議の末「疎開学園育成会」を結成していることを後になって聞いてびっくりしたものである。たまりかねた父兄たちは晩秋のある日突然育成会から数名の代表を視察によこした。体のよい監察である。好機到来とばかり私は喜んで迎えた。一泊してつぶさに実状を視察して安泰な疎開生活と職員たちの労苦も理解し、冬季対策など詳細に説明を聞くに及んで杞憂であったことに気がついて安心して下山したのであった。

#### ○相次ぐ帝都空襲と苦難の越冬

サイパンに前進基地を造った米軍はいつまでも黙しているはずがない。平穩を謳っていた東京も、11月頃から敵機の襲来が度重なってくると人心は一変してきた。東京は危い。出流は安全だ。子どもだけでも安全地帯で守って欲しい。父兄の願いであった。「先生、自分の家が空襲でやられたら、私たちが疎開の仲間に入れてくれるとよいが…」本気で言う人も出てくるほどに様相が一変して誰一人不満を漏らす者がなくなった。

しかし、こうした中でも80余名の大家族の生活を維持することは難事であった。米の配給から野菜の供出依頼、副食物等一切の物資を賄って行

かなければならない。その上馴れない土地である。郡役所と村役場、そして各部落会長、坂道田舎道を自転車を引きずって廻るだけでも大ごとである。どれもこれも心身をすり減らすことばかりであった。そして冬の到来は疎開生活を一段と厳しいものにした。薪炭を確保するために険悪な山道から子どもたちに荒縄で背負わせて運搬作業まで幾度となくやらせたものである。あの一見ひ弱に見えた子どもたちが不平も言わずに奥山から薪を背負って下って来る姿よ!

寒気がひどくなると水道の水が凍って出なくなる。この修復も2人の男の教師の手によるほかはない。しかしこんな作業よりも1月末から2月にかけての感冒が怖かった。集団生活のことであるから感染の防ぎようがない。日毎に蔓延して大半の子どもが罹病するほどになった。村の囑託医もすぐは来てくれない。それも山道を自転車で上って来るのであるからなお更波るのである。看護婦の松本の不寝の日が続いたのもその頃である。

疎開学園日誌が感冒記事で埋められた日が2ヶ月も続いたのである。重病者が出なかったのがせめてもの救いであった。

#### <おことわり>

以下の項は紙数の都合上割愛する。

- 六年生進学のため帰京
- 担任中沢先生戦災死を遂げる
- 再疎開を逸れて出流万才
- 10月母校復帰学校再開(11月)

以上

## 守られた子どもたち

阿部光子

昭和19年8月19日、3年生以上が集団疎開で出流へ発たれた後、2学期からの学校は、1・

2年残留組だけで、教師も桃井先生と私、関先生と事務の中沢先生と4人だけで、誠にひっそりと、

淋しいものでございました。たゞ外崎先生が疎開地から色々なご用で帰京なさって、報告会や相談会を開かれるとかいう時には、お母様方も学校へ集まっていられるので、その時だけは、もとの学校に甦ったような感じが致しました。

皆さんがいらっしゃった7月迄は、キャフテリアで、あたくしのお昼の給食が頂けたのですが、2学期にはもうお米の配給もなく中止。9月初めにパン屋さんから、蒸パンが届けられ、それからコッペパンが配給されるようになりました。食料事情の厳しい中でしたが、都では学童の為に色々配慮して、時には学童1人20銭の焼きいもの配給もあり、お八つの少くなっていた子どもたちを喜ばせてくれました。しかし空襲は日毎に激しくなり、12月になるといよいよ空襲の危険が迫って、学校の授業休止の指令が出され、学校を休ませなければならぬ事態も起きて参りました。休校した後の登校児童の数はぐんぐんと減って、12月11日は2学年で2名になってしまいました。

出席出来ない子ども達は、家庭に待避していることや、縁故疎開に出てしまわれたやら、その消息もつかめない時になりましたが、各々が大切な生命を守り合って再び見える日まで、英和の子ども達として、主のよい香りを放ちつゝ育てられて欲しいと祈らせられました。

3学期になりますと、残留の学童疎開を、どうするかという相談があり、現2年生、新年度には3年生になる者は集団疎開に合流して出流の寮にはいることに決定し、休んでいる子ども達の家庭もたずね歩いて、疎開の大事なことを話し、準備を進めておりました。

そんな中に3月10日の大空襲があり、5日に疎開地から、卒業生を連れて帰京なさった中沢先生が、被災なさってお亡くなりになるという悲し

い事も起こりました。麻布周辺も処々被害を受けて、いよいよ危険の迫ったことを感じる中で疎開児童の荷物が学校に運ばれ、出荷を待っていた時、疎開予定の児童のおうちが罹災し、行けなくなる等、予想のつかない事が次々と起こりました。

それでも13日には、無事12名が、出流に向けて、上野を出発いたしました。今後の事についても、見通しはつかず、不安な不安な旅立ちでした。可愛いお子様を手離されるご父兄のご心情も察せられましたが、引率して参ります私共にも、重い責任を負わせられましたので、何としてでも、この子ども達は守り通さなければと、車中も神様に聖手の守りを祈り続けて参りました。無事に栃木駅に着かして頂き、此処から木炭バスで、安全な山の疎開地へ向って走りました。

無理に温いおうちから離された子ども達の中には、めそめそした子もおりましたが、あの恐ろしい空襲から逃れられたという安心感を覚える者もあって、みんな一緒に、奥山の静かなお寺の大広間に、疎開第一夜を迎えさせて頂き、感謝を致しました。

ところが、1か月後には東京に残った新2年生も、疎開に受け入れるという事になったので、4月10日、8名の生徒を迎えに帰京致しました。この子達は空襲の恐ろしさを一番多く経験させられていたので、東京には、未練が少く、最年少の子ども達でしたが、一番元気で疎開には行って参りました。東京に残られたこの子達の親ごさん方は、去年疎開にお子さんをお出しになった方々とは違って、疎開地は安全だという信頼のお気持ちで、子どもの心を、こんなにも力づけて下さった事と思いますと、このご期待に応えられるように、一層神様のみ恵みを子ども達と共に疎開地で拝させて頂き度く、祈りを持って踏み出させて頂いたものでした。

## 疎開生活を想う

花島光子(旧姓高橋)

当時小学4年生であった私は、東洋英和小学部の集団疎開に参加して、それから2年余り、つまり終戦迄を栃木県下都賀郡の山奥で過ごした。この地にお世話になるに至ったいきさつや、諸先生、関係者のご苦勞は全く知らぬままに、しかし、子供心にも毎日に増す戦局の不穏な気配に、大変な時代になった事を自覚して、家族と別れ東京を離れた。

栃木駅からバスに揺られて辿り着いた出流山満願寺は、途方もない山の奥の、杉木立に囲まれた古いお寺で、その山門の両側の仁王像がいかめしく私達を迎えた。広い本堂、長い廊下に面して数多い小部屋、暗く大きな台所、ちょっと恐い感じのお手洗所等、ここが、其の後、私達に数々の得難い生活体験をさせてくれた場所である。

覚悟はしていたものの、蒲団の上げ下ろし、持物、衣類の整理、洗濯と身の廻り一切を自分でするという事は私にとって一大変事であった。朝、目が覚めるとから先生や、友達とすべて共に行動する事も、馴れるまでは抵抗もあり、トラブルも起きた。特に担任が今迄と違って男の先生(現・小田桐先生)になったので、万事勝手がちがいで、とに角猛烈にしごかれた。柔弱な挙動は許されなかった。

時節柄、讚美歌で礼拝という雰囲気はなく朝礼には皇后陛下がお詠みくださった和歌を合唱した。チャイムが鳴り、本堂の広間に細い机がずらりと並んで食事時間となると、これはもう、我々の最大の関心事だった。寮母先生やお手伝いの方達の並ならぬお骨折りなど解する筈もなく、目は井の中に集中する。体格の大きい人は「大盛さん」と

称し、分量が少々多く、これが皆の羨望の的となる。半分位じゃが芋や野菜の混った御飯などは上の部で、お米がチラホラ顔を出している南瓜の雑炊、戦時中は殆んどの人が口にしたすいとん、蒸しパン等々、味よりも量、何しろ常に食べたかった。おやつは塩豆を一粒ずついいねいに食べ、ぶどう糖のかけらをゆっくり、少しずつ舐めた事などは、何かもの悲しい思い出だ。時折、差し入れの品を持って面会に来られる父母の姿を、山門から続いた小道で見つけると、すぐそれがお菓子につながって連想された。自分の母でなくてもとても嬉しかった。

いやという程山道を歩き、たき木を拾う。お風呂の燃料である。二宮金次郎よろしく背中に負うのだが、これが重たくて辛くて、帰り道で折角拾ったたき木を少し捨てたりした。お風呂に入るのも容易でない事を知った。この地方の冬の寒さは格別で、私は軒に何本もつららが下っているのを初めて見た。この寒さの中で自分の背丈よりはるかに大きいスーツをもて余し乍ら洗濯した。この本院から更に山道を10数分登った所に別棟があり、ここが私達4・5年生の寮にあてられていたので、夕食が終ると提灯をつけて、歌をうたい乍ら、その寮に帰るのも日課であった。夜の自由時間は、家に手紙を書いたり、お手玉やトランプをしたり、時には皆で反省会などを持った。日記をつけて一日が終ると、寝る時は「夕日落ちて空暗く…」と、讚美歌を歌い、お祈りをして消灯となる。私は消灯後にこっそり編物をして暗闇でも間違わずに編む特技を会得したものである。

学業の方は、曲りなりにも先生方の方針にそっ

て進められ、書き取りなどは割合きびしくやらされたと思う。たまには近くの村の分教室に行って勉強した。自然に親しむ機会が多かったので、木や花の名も目で覚え、雲の種類を観察したりした。文字通り野山を駆けめぐり、おかげで今も私は歩く事に強い。

すべてに我慢を強いられたこの生活の中で、唯一の彩りがあるとすれば、それは団楽会と称し、時々催される劇や、踊や歌を発表する事であった。皆一生懸命に考え、練習した。また、村のお祭に各農家にお招きを受け、心尽くしのお赤飯やお煮しめを、なるべくたくさんおなかにつめ込んだ事もなつかしい。悲惨な東京の戦災、広島、長崎の原爆のニュースも、この山奥では想像も出来ず、

## 同じ釜の仲間

同じ釜のめしならぬおいもを食べて暮した「仲間」を持つ事ができたのは、たとえその時代的背景が戦争という悲劇であったにせよ私達にとってかけがえのない宝物だと思われるのです。

出流山での1年2か月の疎開時代、最年少の小学3年生の母親役兼務の担任をしてくださった岡村節子先生がアメリカへ渡られて20年近く経った頃、そろそろ私共も結婚、出産を終えてやや落ち着いて来たのか、誰いうとなく皆で心がけて何とかして先生を一度日本にお招きしたいと5か年計画の積立てを思い立ったのが昭和40年の秋だったと思います。お互いに乳のみ児をかかえたサラリーマン家庭に無理な計画は長続きしないと的情勢判断は鋭く、当時月額500円ずつ15人がそれぞれの方法で積立てることになりました。5年後に本当に実現出来るかどうか半信半疑の内に4年目にさしかゝった頃には、そろそろ具体案も出

平穏無事な月日が流れ、やがて、私が6年生の夏、玉音放送に依って敗戦が告げられた。そのショックも間もなく、この生活から開放されて家に帰れるという、足許が浮き立つ様な喜びに変わっていった。

戦後33年が過ぎて、我々は過去にこんな生活があった事を語ることは少ない。自分の子供達に理解させるのも無理な程に、世の中は平和で奢っている。英和の疎開学園を組織して粉骨砕身して下さった外崎先生、諸先生また、暖かい人情を心から寄せて協力して下さいました院主様はじめ土地の皆様方に、改めて感謝の意を表す機会もないままに年を重ねた今、思いもかけず疎開の思い出を筆に託す事が出来て、大変感無量である。

## 中川正子(旧姓浅谷)

て来て日本航空に手配する係、お宿の国際文化会館の手配係、羽田へのお出迎えから歓迎パーティー、先生を囲む母の会、思い出の出流行一泊旅行係と、スケジュールと分担が決まる内にいよいよ皆の心も一つに燃え上り、あちこちのお里からの温かいご援助にも大いに助けられて5年を待たず目標額を達成することが出来ました。

サンフランシスコで永年福祉関係のお仕事をしていたらっしゃった岡村先生は、日航職員から届けられた日本行の航空券を手にも夢かとはばかり喜んで下さいました。

昭和45年の春、五月晴れの羽田空港に、25年ぶりに立たれた、浦島花子先生と、あらかじめ打合せ通りの深紅の花束を目印に掲げてお出迎えた34才の元疎開学童達の再会は、正に劇的な興奮そのものでした。

思えば疎開当時の先生は今の私共より10数年

お若いお年で、あの不自由な時代に大勢の子供達を預かって先生としてのお仕事以外に日常生活のあれこれ迄も心を配られ愛情を注いで下さったのでした。十人居れば十色の性格で一人の先生を親と慕うので、不公平にならないように始終心を通わせて下さった先生のご苦勞が今、人の子の親となってみて、身に沁みて感謝と共に思い起こされるのです。

お寺の大広間に置かれたオルガンで色々な讚美歌やバッハを弾いて頂くのも大好きな時間でした。美しいお声でソット（戦時中なので）大人の讚美歌もいくつか教えて頂きました。夜、お布団を敷く時になると争って先生の枕を抱え込んだり、先生のお隣に寝る権利を得た日の嬉しさ、時には集団生活から外れてすね始めた子を叱ったりなだめたり、寝床に入る前に一日の反省と感謝のお祈りすることも教えられました。断片的に思い出される事の一つ一つに先生との心の交流があったからこそ、火の気のない吹きさらしの冬もさほどにつらいとも思わずに過ごせたのでしょう。私共は、何しろ8才の子供で暑さ寒さもさほど応えなかったように思いますけれど、当時の先生方はどんなにおつらかったこと、今になって頭が下がる思いです。なわ跳びのなわで大きな薪を背中にくっつけられ、山道を桜寮迄運んだり、上の楓寮から凍った大根をリレーで下の桜寮へ下ろした時の凍痛など今の子供達にはいくら説明しても判って貰えないでしょうけれど、皆が同じ状況の中で同じ苦しみを分か合った体験は今にしてその尊さが判って来たように思うのです。戦争という大きなあやまちに起因するのでなければ、若い時期にこのような体験を一度はさせておきたいと、余りに豊か過ぎる社会に甘えている子供達を見て思う昨今です。



## 昭和20年をかえりみて

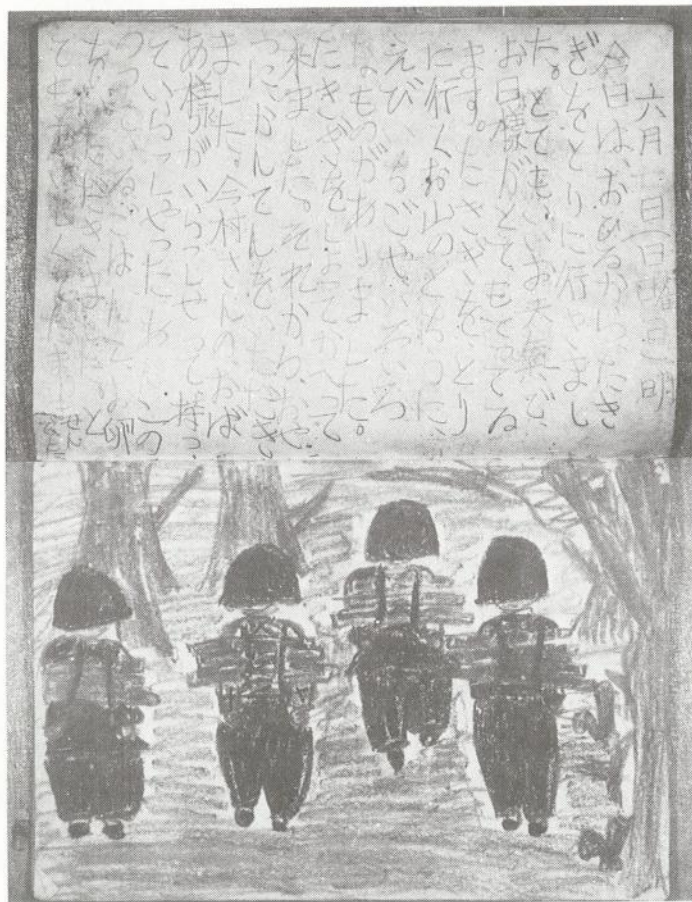
松井くら

昭和20年の春、東洋英和にまいりました時、小学部の上級生は、大体疎開されていました。最後まで残っていた少数の下級生もいよいよ疎開される準備中でした。

出発の日は4月20日頃と記憶しています。外崎先生と阿部先生に引率されて、一の橋から貸切電車に乗り、桃井先生とわたくしも一緒にまいりました。上野駅に着き、たいへんな混雑の中を改札にまでは同行しましたが、見送り人は、入ることができず、時間前に通行止めにされてしまいました。せめて姿の見える所へと駅中歩き回って、やっと着いた所には、大勢のご父兄もいらっしやいました。ちょうどその時、生徒は、プラットホームに向って歩いて行くところ

でした。お互いに背伸びして見送り声も届かぬまま、唯、手を大きく振って、「さようなら」と無事を祈るのみでした。むせび泣いていらっしやるお母様方と共に涙の出るのを抑えきれませんでした。家族と別れるたえがたい情景を目前にして、「無我夢中」とは、このような瞬間を言うのでしょうと思いました。

わたくしは、急いで学校にもどり、留守中に課せられた仕事をどのようにして果たせるかと、唯思案にくれました。種々雑多の用事に困惑したり、あれこれと追われててんてこまいをしたりしました。数日たって母の会委員が見えて、疎開先きの出流山に行きたいが、何か方法はないものかとの問いがあったが、それに答えるすべもないのに、委員は、交替で聞きにみえました。そして、配給制度の中から



疎開地 出流山の分教場 絵日記 長谷川照子(旧姓多崎)

出流山に送る分を届けられたが、主食米のない時のこと、大部分は、大豆でした。そのような物資の荷物造りの重労働を、出流山からたまたま帰校される外崎・高崎先生が空襲のあい間をぬってされるのです。また、母の会の方では、お子様に逢いたい一心でどんな手段でもしてとの願望は強く、面会許可の証明書を物資不足の折り、印刷物の裏を利用して書いてさし上げました。毎日、何人かのご父兄がみえるたびに、あの空襲中の危険も恐れず我が子を自分の目で確かめないではいられない切実な思いであることを深く感じました。そのような毎日をくり返しているうちに、余り度々、続く疎開地訪問に、駅では、切符も売らない、証明書も出すなどのお叱りでストップされてしまいました。留守をあずかるわたくしは、お母様方の切実な思いを心に覚えながら、数知れない用紙の必要もなくなりほっとしたのです。

しかし、ゆだんはできず空襲は、刻々、激しくなり学校周辺や六本木一帯に爆弾が落された夜は火の海となりました。校舎に火が入らぬよう皆で戸締りを厳重にしました。消火水もばげつりレーぐらいではとても足らず、その上、防火用ホースも破損だらけで役には立たなかったのです。でも、学校に泊っていらした先生方と小人数ではあったが、あのように消火に当たったことは驚くべき実力であったと思います。後になって思い出してみる

と警報が発令されるたびに、一番安全だと思われる地下の暖房室にとんで行きましたが、危険もあると言われ、料理室を避難所にして毛布を頭からすっぽりかぶり警報が解除になるとほっとしたことも何回もありました。

もはやその恐れもなくなり、8月15日の終戦を迎えました。その後、学校は、戦災で焼け出された家族や警察署・関東軍等と同居の大集団になりました。そのため、学校への出入りは激しく校内は、おちつかない状態でありました。校舎は、破損もありましたが、幸いにも無事でした。

秋になって、それぞれの疎開地から引き上げていらした先生方や生徒もおいおい集まり、授業を始めるようになると荒れはてた校舎や教室も次第に整い、やっと「英和」をとりもどしたことが、実感として胸にわきあがりました。

その翌年の春卒業された6年生、松本寿子先生のクラスの修学旅行は、疎開地の出流山満願寺でございました。とても静かな空気の良い所でありました。わたくしも、ご一緒させて頂き、思い出の逸話等 いたり鍾乳洞のある裏山に登ったり、たいへん有益な旅行でありました。

今、過去をふり返って、昭和20年は、人生の大悲劇の年でありました。

(昭和53年10月13日記)

お 願 い お知り合いの東洋英和関係の方々で、史料室だよりを直送してほしい方がいらっしゃいましたら、委員までお知らせください。

あ と が き 第5号の史料室だよりは、創立記念日に小学部の疎開記事を特集して発行いたしました。この特集に執筆して下さった方々、写真・絵日記を提供して下さった方々に厚くお礼申し上げます。東洋英和がああ戦争の中でキリスト教教育を守り進めてきたことがおわかり頂けると幸いです。苦しみの中であって常に主を仰いで進んでこられた先生方、生徒の皆さんに改めて敬意を表しております。新しい95周年の年に歩を進める時に、主の導きを祈りたいと思います。

(小学部 倉本・野田)